



2021年（令和3年）
6月号（No. 913）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

山よりも本が大事と……

—近藤等先生の蔵書をめぐって—

大森久雄

ガストン・レビュファの『星と嵐』や『雪と岩』、モーリス・エルゾグの『處女峰アンナプルナ』など、アルプスやヒマラヤ登山の名著を数多く翻訳された近藤等さんの蔵書や資料が、このたび大町山岳博物館に寄贈された。日本の登山界に大きなインパクトを与えた近藤さんの業績を、改めて大森会員に振り返ってもらった。

先年亡くなった近藤等先生の蔵書の整理が、ひとまず終わった。それを契機に、その蔵書処理のことや本と人のことなどをまとめてほしいという依頼があつて書く羽目になったのだが、少々厄介。

というのは、私はすでに会報（2016年848号）、『山と溪谷』（同年3月号）、『岳人』（同年2月号）、『mitren』（同年7月号）などに近藤先生の追悼を寄稿している

し、この会報「山」には本をめぐると話を載せたこともあつて（2012年801号）、それらとの記述の重複を避けられないからである。というわけで、近藤先生の蔵書、業績、山や周辺の事情など雑多な内容になることをはじめにお断りしておく。

カルチャー・シヨック

フランスの山岳図書の紹介で近

目次

山よりも本が大事と……

—近藤 等先生の蔵書をめぐって—	1
晩年の深田久弥さんと世界百名山	4
支部長が代わりました	6
図書および資料のデジタル化と公開	7
1933年発行の1枚の会員カード	8
地域発「山の日」レポート⑨山陰支部	9
連載 島の山旅への誘い⑥	10
新入会員	13
図書受入報告	13
東西南北	14
図書紹介	15
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

藤先生の果たした業績が大きいことは、いまさら言うまでもない。戦後間もなくのことだから、現在とは山の世界の雰囲気も状況も違っているが、手ぬぐいのハチマキ、草鞋に脚絆、破れたチョッキ、そんな姿が山へ行くときにはあたりまえだった時代、近藤先生の紹介するフランスの山の本から流れてくる状況は、天と地の違い、まさに天国的な華やかさを持っていた。ここに掲載する写真でわかるように、氷河を背に大岩壁を登るガストン・レビュファの姿は、ため息なしには見られなかつた。こういう写真



シャモニ針峰群の一角に立つガストン・レビュファ『雪と岩』（新潮社・1961年刊）より

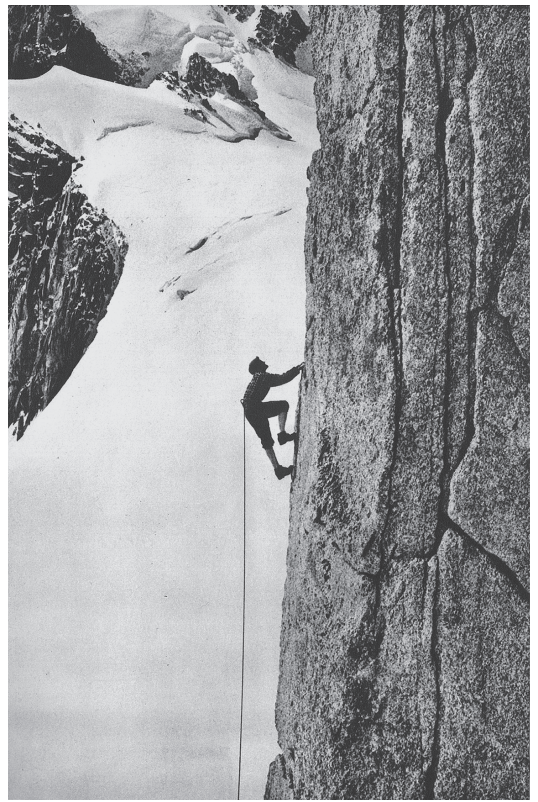
を掲載しているのが『星と嵐』『雪と岩』に代表されるレビュファの著作群だった。それは日本の山の本の枠を飛び越えた別次元の内容で、いまの時代からは想像できないインパクトを私たちに与えた。

*

モーリス・エルゾグの『處女峰アンナプルナ』が刊行されて、それを読んだ時の衝撃的な印象は、多

くの人が口にしてゐるし、ガストン・レビュファの著作群から流れてくる、爽やかな大岩壁登攀の記述と写真もまた同じ反響だった。鎖国状態からやつと抜け出た1950年代のことで、それは一種のカルチャー・ショックであつた。

山登りにファッションという感覚が流れ込んできたのも、こうした著作群からで、レビュファの着るセーターがはやつて、レビュファ・ルックとも言える姿が日本の山のあちこちで見られた。山岳写真の分野でも、明らかにその影響と思われる作品が現れるようになった。そうしたインパクトをもたら



シャモニ針峰群の壁を登るレビュファ(『雪と岩』より)

す大きな動きは、田口二郎『東西登山史考』(岩波書店)でも「近藤等の訳業が果たした功績は大きい」と評価されている。それは、文学の世界で言えば、上田敏の訳詩集『海潮音』、坪内逍遙によるシェークスピアの訳業が、日本の近代文学に影響を及ぼしたのに比べられる現象であつた。

ラテン的な明るい世界

日本の山登りは、木暮理太郎・田部重治から深田久弥へつながる輸入品ではない流れが主流だが、フランスから届く動きは、それとは別種の、地中海的・ラテン的な

明るい世界であつた。深田久弥は、その著作『ヒマラヤの高峰』所載「アンナプルナ」の項で、正確だが裁判所の記録のように味がないイギリスの本や、観念過剰の感傷的なドイツの本とくらべて、エルゾーグの本は、小説でも読むように面白い、と書いている。つまり、従来主流だったアーネスト・サトウやウエストンに代表されるアングロサクソン、ゲルマン系の流れとは別に、ラテン系の山の文化の移入が「近藤等の訳業」であつた。

『星と嵐』という書名もまた新鮮で、山の本とは思えなかつた。『處女峰アンナプルナ』も同じ。余談だが、フランス語版の原書名は「アンナプルナ 最初の8000」という素っ気ないもので、それにいまでは使われない「處女峰」という言葉を付けたのは、版元・白水社の意向だったと近藤先生から聞いたことがある。

余談ついでだが、近藤先生は数多くの翻訳を手掛けていたが、訳書の選別はきちんとしていたようで、親しい仲のエルゾーグが晩年出した本を、日本語版にしてくれと頼まれたが、読んでみると品のない内容が含まれていたで、こ



勝子夫人とくつろいでいる近藤先生(1960年代)
飯田年総会員提供

れでは日本の読者に紹介できない、と断つたとも聞いたことがある。数多い訳書の選別には、こうしたフィルターが、つまり近藤式浄化装置が働いていたのである。

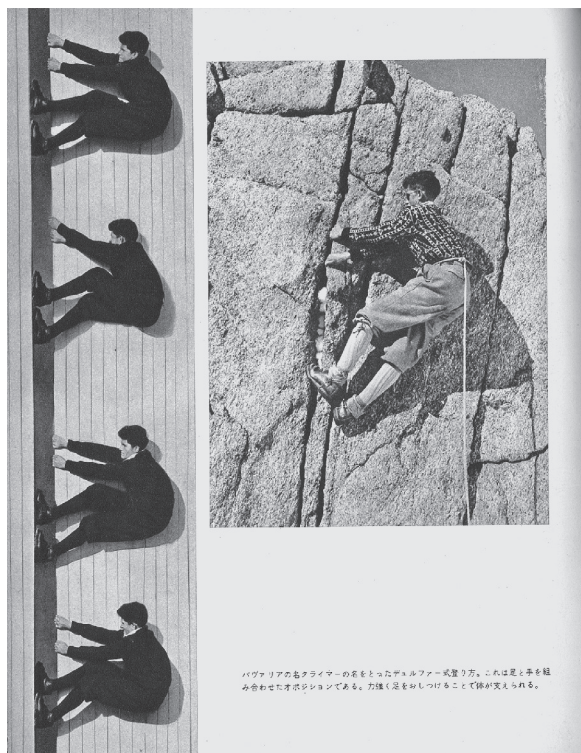
＊

訳業だけではない。ヨーロッパ・アルプスがどんなに魅力的な世界なのか、それを紹介する著作もある。『アルプスの名峰』(山と溪谷社)、『わが回想のアルプス』(東京新聞出版局)、『アルプスの蒼い空に』(茗溪堂)などを読まずにアルプスに遊ぶ人は、大きな宝を見落としてことになる。さらに、山と文学・絵画の世界を解説してくれたのも大きな業績で、『アルプス 山と人と文学』(白水社・19

65年)、『アルプスを描いた画家たち』(東京新聞出版局・1980年)などは、それ以前も以後も日本では類書がない、貴重な資料である。アルプスにはどんなに豊かな世界が広がっているのか、それを教えてくれたのがこうした著作である。シャモニは名誉市民に、フランス政府はレジオン・ドヌール勲章を授与して、そうした業績にむくいた。

山登りは文化的行為

近藤先生にはお子さんがなかったし、養女も夫人も先生の後を追



バヴアリアの北アライマーの岩をとりながらアルプス式登り方。これは足と手を組み合わせたオポジションである。力強く足を押しつけることで体が支えられる。

クライミング技術の解説についても様々な工夫が(『雪と岩』より)

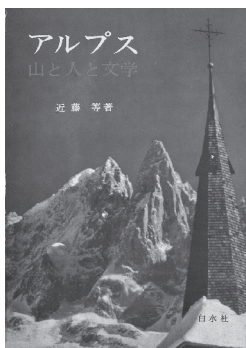
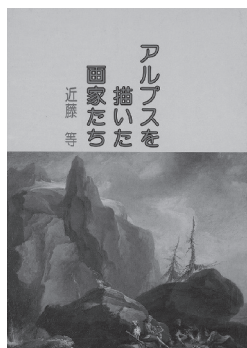
うように亡くなったので、蔵書類の始末が問題だった。その整理のために、長年近藤先生と親しくお付き合いをしていた早大山岳部OBの成川隆顕会員、本会図書委員会委員長で『山と溪谷』元編集長の神長幹雄会員、グラフィック・デザインナーの小泉弘会員、明治大学教授だった飯田年穂会員と私が何回か集まって相談した。蔵書の始末は多くの会員も悩みの種であろう。著名な蔵書家・鹿島茂氏に『子供より古書が大事と思いたい』(文春文庫)という面白い本があり(本稿のタイトルはそれを借りた)、

そこでも、古書は市場に出すべきだと書かれている。古書店の世話になる、ということだ。

たしかに、古書店に流れれば、本はそれを探し求めているひとにつかは出会うのである。長年探している本が、ある日ある古書店に入ったとたん、目に入った、ということとは私の経験でも何回かある。それは東京の神保町・早稲田でもパリ、ジュネーヴ、シャモニでも同じであった。ここにいるよ、と本が呼ぶのであろう。ネット検索が機能している現代でも、それは当てはまる。

「登山とは文明的な行為ではなく文化的な行為」とは加藤泰安『森林・草原・水河』所収「登山界よ、どこへ行く」にある言葉で、桑原武夫もまた、『登山の文化史』のなかで同じことを語っているが、こうした言葉を体現しているのが本である。本の持つ重み、それは山登りの特徴の一つで、それがなければ、私たちの山登りは貧しさから抜け出すことはできない。数多くの優れた先人が、どのような山の世界を築きあげてきたのか、どんなに豊かな世界をつくってくれたのか、本はそれを確固としたも

のにしてくれるし、私たちの山登りを価値あるものにもしてくれる。本稿で取り上げた本は、幸い本会図書室に収納されている。そのほかの蔵書・資料は、成川会員の尽力と長野県大町市の山岳博物館の好意で同館図書室に収納された古書店に渡ったものもある。この機会にぜひご利用いただきたい。



ヨーロッパ・アルプスを紹介した代表的な著作。右から『アルプスの名峰』『アルプス 山と人と文学』『アルプスを描いた画家たち』

REMEMBRANCE

晩年の深田久弥さんと世界百名山

黒田洋一郎

深田久弥さんが亡くなってから、もう今年で50年になる。この50年で、深田さんの名は昔よりはるかによく世間に知られるようになったが、彼を直接知る人は少なくな

った。親しかった友人知人など深田さんを知る人の大半が、あの世に行かれてしまった。私は晩年だけのお付き合いだったが、そのころちょうど深田さんが苦勞して書いておられた「世界百名山」連載の事情と、その後の「私の世界百名山」連載など、山の登り方、眺め方などへの深田さんの影響を述べる。

「高旅行部の再建だ」

私は1963年、大学に学術調査探検部を創った。学生および大学院生を通じて9年制で、部長は泉靖一さん（東大東洋文化研究所所長／文化人類学教授、旧京城帝大時代に山岳部を創り、インカ遺跡発掘で有名）にお願いした。泉さんと深田さんは、高田宏さん（深田さんと同じ石川県大聖寺の生まれ。のちに「深田久弥山の文化館」館

長）が作った『エナジー』という石油会社の広報誌の傑作「探検特集」で顔見知りだった。

それもあるのか、深田さんは「探検部創設は一高旅行部の再建だ」と大いに喜ばれ、すぐに部の顧問になってくださった。私は探検部の初代マネージャーだったので、部の報告や相談に東松原のご自宅に何回も訪れる機会があった。飛び込みで行っても、私が高校で長男の森太郎さんと同期であったためもあるのか、深田さんのマネージャー格であつた志げ子夫人は大変親切で、なんとか忙しいスケジュールに割り込ませてくださった。今思うと深田さんは、私をどうも「今はなき一高旅行部の後輩格」として扱ってくださったようで、ビールを飲みながら気安く登山や探検などの話をしてくださった。深田さんは「縦の会（一高旅行部OB会）」の会員ではあつたが、本郷のスキー山岳部には入ってはおらず、山岳部の後輩は元々いなかったのである。「縦の会」といえば、

晩年ご夫婦でギリシャや東欧の山々を楽しんでおられた中村純二さんが最後の世代で、私も親しくしていただいたが、残念なことに昨年、亡くなられてしまった。

ヒマラヤからシルクロードへ

最近では、『日本百名山』の著者として誰でも知っている深田さんだが、私が探検部創設でお世話になったころまでは、むしろヒマラヤ研究家として、地味に山岳関係で有名だった。そして、深田さんには、「英仏などの山岳関係の古書、文献を、高価でも手に入れ（志げ子夫人の理解と助力もあつた）隅々まで読むなど、古い山の資料を丹念に調べる」面があつた。

実は、晩年の1960年代後半から70年ごろは、深田さんも新しい方向に向かつていたらしい。あるとき志げ子夫人に「もうヒマラヤは卒業して、これからはシルクロードをやりたい」ともらし、「山から麓に変わったの？」と夫人が尋ねると、遠くを眺め、懂れるような目をして「麓には長い歴史があるからなあ」と答えたそうである（深田さんの本当の絶筆、深田久弥・長沢和俊著『中央アジア探検

史』（白水社、1973年）の巻末、志げ子夫人の後書きより）。

志げ子夫人の話は後で読んだので、この深田さんのシルクロードへの転進は、当時は知らなかった。道理で、正式に探検部の顧問をお願いにご自宅に伺ったとき、深田さんは古い本や地図、写真を次々に出し「第1回の遠征は、シルクロード探検にしよう」と熱心で、井の頭線の終電を逃しそうになった。今考えると、学術調査探検部の遠征でシルクロードの中央主要部分、中国の河西回廊から楼蘭、ニヤなどの遺跡を含むタクラマカン砂漠、カシュガルへのオアシスの道の旅を、夢見ておられたのであろう。これらの部分の遠征は、当時の中国の政治情勢から絶対に無理だったが、可能だったソビエト連邦中央アジアの都市など西の部分分は、実際1966年に約5ヶ月もかけて行っている。

難産だった『世界百名山』

たびたび訪れたご自宅で、当時の深田さんは名著『日本百名山』の出版後、その世界版として『岳人』誌の「世界百名山」の連載執筆に苦勞されていた。



ノルウェーのスネーヘッド(右)とスペインのアネト。深田さんが想いを馳せたであろう山々。『La montagne』(Larousse、1956年)より

今では信じられないほどだが、当時の世界の山々は国際航空便の発達が悪く、登山家でも世界の

山々には、まだ実際には行けない山が非常に多い状態であった。一流登山家と言われた人でも、自分で直接見たり登ったりしている山は、アルピニスト好みのごく一部の山に過ぎず、知らないほかの山は、写真や伝聞で勝手に選んでいた。深田さんもこの事情を「世界の主な山を全部見た上で百を選べる人は、世界にまだ一人もないだろう。しかし、世界は狭くなりつつある。やがて、そんな人が出てくるかもしれない。」と、死後に出版された深田久弥著『世界百名山―絶筆41座―』(新潮社、1974年)の最初に書いている。

米国の山岳家・アレマン(Mountaineer Ullleman)は、深田さんより前に「世界の百の山」を選んで発表していたが、アルプス、ヒマラヤにひどく片寄っており、深田さんは『毎日グラフ』上で、アレマンの選択のひどい地理的な不公平さを批判していた。その深田さんの批判を山岳雑誌『岳人』の編集長が読んだためもあるう、深田さんは「世界百名山」の執筆を頼まれ、外国旅行中で、まだ承諾もしていないときに、勝手に雑誌に予告が出るといふ錯誤があり、執筆を

むなく引き受けられた。

深田さんは、はたで見えていても、この難しい原稿に四苦八苦しておられた。旅行部の後輩格の私には気安かったのであろう、問わず語りに「実際に世界の山に行きにくいのはもちろん、今、世界各地の山々の情報は、アルプス、ヒマラヤなどに偏り、まだまだ少ない。その上、私は最近いろいろ忙しいので、私のやり方である、丹念に外国の文献資料を集めることが、もう十分にできない。月刊誌に毎号1山ならともかく、毎号3山も書くのは、時間的、体力的に無理だ」とボヤキながらも、必死で連載を続けられていた。

実際、「世界百名山」連載中、ある号ではアララト1山しか書けず、余録として、忙しくて残りの2山は書けなかった事情を詳しく書き、しかも最後には、「『日本百名山』は自信があるが、世界の百名山は自信がない。このような自信が無いことをはじめたのは私の内部の意志よりも、外部から押し付けられた気味が多分にある。しかし弱音を吐いているのではない。世には押しつけられても立派な仕事を果たした例が幾らでもある。徹夜で

ここまで書いて、とうとう(夜が明け山への出発)時間が来た。……」と自分を鼓舞している。この老いた深田さんの「世界百名山」への執念を、身近に見てきたこともあり、没後まともられた『世界百名山―絶筆41座―』にも刺激され、できた深田さんの遺志を継ぎ、せめてもの恩返しに私が世界百名山をやりたいと思っていた。

幸い私のこの志は、東京都神経科学総合研究所勤務の忙しい40歳代から実現しつつあり、藤田恒夫編集長のご好意で、医学文化系季刊誌『ミクロスコーピア』に66山まで連載できた。なお、この私が眺めて選んだ「私の世界百名山―山と人と花鳥風物―」のリストや紀行文と絵地図、カラー写真は、探検部の前に卒部した東大ワンダーフオーゲル部(TWV)の藤野浩一さんに還暦祝いにつけていただいたHP(<http://www.age.jp/~yusan-jin/>)で、関係する私の文とともに66山全部を見ることが出来る。

なお、日本の山岳信仰の研究は多くやられているが、世界でもやっている人の少ない「世界の山岳信仰」を、次号の『山岳』(2021年版)に掲載予定である。

支部長が代わりました

山形支部 鈴木理夫さん

このたび山形支部長に就任いたしました。本支部は1950年に創立された、長い歴史を誇る伝統ある支部です。

私の登山は高校で山岳部に入部し、鳥海山を中心に朝日・飯豊連峰などを登ったことから始まりました。大学でも登山を続け、日本全国の山々を登ることができました。進学したのは東京の大学でしたが、就職に際し地元へ帰ることを選んだのは、鳥海山の見える所で生活したいという強い願望が理由の一つです。豊富な残雪、咲き誇る高山植物、日本海を見下ろす眺めと海に沈む夕陽など、尽きない魅力があります。今でも朝夕、鳥海山のシルエットを見ると、心が躍ります。そのほかにも山形には月山、蔵王連峰、吾妻連峰、神室



山形支部長 鈴木理夫さん

連峰など魅力に富んだ、自然豊かな多くの山々が存在します。

新型コロナウイルスの感染防止のため、昨年度は支部の行事の大半を中止せざるを得ず、今年度も現段階では予定の活動を実施できない状況にあります。支部活動が全面的に再開できる日を心待ちにし、今後に向けた準備に取り組んでいるところとです。山形は山岳信仰と関わり深い山が多く、「全国山岳古道調査」を機に、県内の山の新たな魅力を我々が再認識するきっかけにできれば、と考えています。

支部の公益事業として、県内各地の小学校に「学校から見える山」の絵を贈呈する取り組みを2016年から行なっています。県内の主な地域を一巡し、好評を得るなか今後の活動の在り方を模索する必要があります。また、会員の高齢化や会員数の減少傾向も山形支部が直面している大きな課題です。支部活動への参加拡大と、新規会員の確保を図りつつ、充実した楽しい活動を実現したいと考えています。他支部の取り組みも参考にさせていただきたいと思っていますので、ご教示のほど、よろしく願い申し上げます。

静岡支部長 中村博和さん

高校山岳部入部を機に山を始め、大学では山岳サークル、社会人になって友人および個人山行にて月2〜3回の山行、夏はアルプスのテント縦走というスタイルを36年間続けています。JACには南アルプス深南部に行きたく入会し、今では支部恒例の会員山行として年1回、深南部探訪を楽しんでいます。

支部総会でリニア中央新幹線静岡工区工事中止決議を機に、南アルプスの自然保護を訴えるため、川勝静岡県知事と面会し「ともに力を合わせて、南アルプスの自然を守りましょう」との賛同を得ました。報道でも取り上げられ、JACの影響力の強さを実感しました。この発信力を活かし、静岡の有力山岳3団体（県山岳・スポーツクライミング連盟、県勤労者山岳連



静岡支部長 中村博和さん

盟、静岡市山岳連盟）や今年4月に創設された県富士山・南アルプス保全室と協働して、リニア問題に絡む南アルプスの自然保護を呼び掛けていきます。また、「山の日」の記念行事や南アルプス写真展など岳人のみならず山登りをしない一般の方にも、山のすばらしさをアピールできるイベントを盛り上げていきたいと思っています。

将来を担う若手会員の入会促進も課題です。事務局にIT担当役員を新設して、インスタグラムやフェイスブックを立ち上げました。ホームページの刷新も行ない、若者向けに行事の告知をしていきたいと考えています。

また、役員負担軽減のため、リモート会議や会報のPDF配信を進める方針です。役員の慰労も兼ねたワーケーション合宿など、やらされ感だけではないお楽しみ企画も入れて、モチベーションアップを図りたいと考えています。

静岡支部は「文珠山荘」という夜通し飲み、歌い、語り合うサロンとしての場もありますし、会員山行も目白押しです。クラブライフを満喫できるよう、支部運営にご協力よろしくお願いたします。

NOTICE

図書および資料のデジタル化と公開

デジタルメディア(DM)委員会では創立120周年記念事業の一環として、本会が所蔵する図書および資料を可能な範囲でデジタル化し、恒久的に保存するとともに一般に公開しています。

本会は山に関連した貴重な図書や資料を所蔵しています。それら貴重な図書や資料が災害や経年劣化で失われる前にデジタル化し、また、会員共有の財産とすることにも広く世間に公開することで、山岳文化の維持・発展に寄与できると考えるためです。

◆すでに公開した資料

会報「山」は1930年10月から現在まで、機関誌「山岳」は1906(明治39)年の創刊号から現在まで、それぞれ紙媒体をスキャンしてPDF化し、各号の個人情報情報を削除して、ホームページでご覧いただけるよう公開しています。

また、日本山岳会創立百周年を記念して作られた「写真で見る日本山岳会」の百年」は、資料映像委員

DM委員会委員長 大塚幸美

会がホームページ公開用に、写真のキャプションなど修正を加えたものを掲載しています。

シュラーギントワイト3兄弟がインドおよび高地アジアを探検調査し、調査報告書とともに出版された大図録集『シュラーギントワイトアトラス』は、資料映像委員会が手間を掛けて実物を丁寧にスキャンし、デジタルデータをホームページで公開中です。

◆今後デジタル化を進める資料

「マナスル初登頂」や「エベレスト登頂」などのヒマラヤ関連の登山隊記録は、今春に開催される予定だった「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」(開催延期)に合わせてスキャンを進めました。

美術的、学術的にも優れた資料として評価を受けている植物図鑑「蘭花譜」も、すでに資料映像委員会が写真撮影しデジタル化の準備を進めており、『シュラーギントワイトアトラス』同様にスキャンしデジタル化を進めております。

「日本山岳会所蔵のヒマラヤ登山映像」はDVDが存在しますが、保存の寿命もあることから新たにDVD作成をし、データとしてサーバーにも保存します。

さらに、日本山岳会各支部が所蔵する記念誌なども今後、デジタル化する予定です。

そのほか、資料映像委員会や図書委員会、支部などがふさわしいと考える資料を、できる限りPDF化もしくは画像化を進めてまいります。

◆公開されている場所

日本山岳会ホームページのトップ、黄色のバナー(日本山岳会創立120周年記念事業)をクリック。次のページで最下部(所蔵図書・資料デジタル事業)をクリックしてご覧ください。該当ページのURL: <https://jacl.or.jp/about/inkai/120kinen/202009288912.html>

なお、デジタル化にご協力いただきました以下の方々には、心より感謝いたします。会報「山」バックナンバーをご寄贈くださった黒田正雄様(7310)、図書委員会、資料映像委員会、会報編集委員会、『山岳』編集委員会、事務局の皆様、ありがとうございました。

公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

HOME | 活動紹介 | 概要/本部・支部情報 | 入会情報 | お知らせ | 山の資料

HOME > 山の資料 > 機関誌「山岳」バックナンバー

機関誌「山岳」バックナンバー

日本山岳会が保有するWebサイト及びSNS媒体等以外への転載・使用を固く禁じます。
pdfのファイル容量が大きくなっております。回線の状況でダウンロードに時間がかかる場合がありますのでご注意ください。

■ 機関誌「山岳」総索引

2015/ vol.110	2016/ vol.111	2017/ vol.112	2018/ vol.113	2019/ vol.114	2020/ vol.115
2009/ vol.104	2010/ vol.105	2011/ vol.106	2012/ vol.107	2013/ vol.108	2014/ vol.109
2003/ vol.98	2004/ vol.99	2005/ vol.100	2006/ vol.101	2007/ vol.102	2008/ vol.103
1997/ vol.92	1998/ vol.93	1999/ vol.94	2000/ vol.95	2001/ vol.96	2002/ vol.97
1991/ vol.86	1992/ vol.87	1993/ vol.88	1994/ vol.89	1995/ vol.90	1996/ vol.91
1985/ vol.80	1986/ vol.81	1987/ vol.82	1988/ vol.83	1989/ vol.84	1990/ vol.85
1979/ vol.74	1980/ vol.75	1981/ vol.76	1982/ vol.77	1983/ vol.78	1984/ vol.79
1972/ vol.67	1973/ vol.68	1974/ vol.69	1975/ vol.70	1976/ vol.71	1977/ vol.72

機関誌「山岳」のバックナンバー検索ページ



公開場所QRコード

MEMBERSHIP CARD

1933年発行の1枚の会員カード

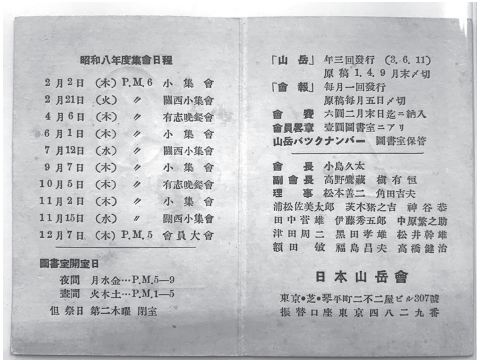
資料映像委員会担当理事 清水義浩

昨年、京都・滋賀支部の松下支部長から「1933 会員章367号 田辺朔郎」と書かれた、1933(昭和8)年発行の、赤い表紙の会員章を資料映像委員会に寄贈していただきました。会員章には「昭和八年度集會日程」のほか小島久太会長(小島烏水の本名)や副会長、理事の名前が表記され、日本山岳会の所在地は「東京・芝・琴平町二 不二屋ビル307号」と記載されていました。

また、会費は「六圓二月末日迄二



赤い布目紙の会員章表面



1色刷りの会員章の中間

納入」と書いてありました。昭和8年の新聞広告には、電気アイロンの1圓75銭、手回しミシンが6圓と書いてあり、現在の貨幣価値に換算すると、およそ1万5000円から1万8000円程度と予想され、年会費の6圓は、今よりも高い会費だったようです。

この1枚の古い会員章、88年前の会員章とは思えないぐらい保存状態も良く、往時を知る貴重な会員章です。そして、この会員章の持ち主は？ と興味はさらに進み、

いろいろと調べてみました。会員章には「田辺朔郎」と書かれていますが、「田辺朔郎」の間違いのようです。日本山岳会の名簿には、間違った「朗」の字で登録されています。田辺朔郎さんは、1914(大正3)年11月の入会、紹介者は、比企忠さんと今村幸男さんです。朔郎さんは、土木技術者で工学者だった方で、琵琶湖疎水や日本初の水力発電所を建設、また、北海道の幹線鉄道敷設計画に携わり、北海道の狩勝峠の命名者でもあります。京都のインクライン近くの公園には、田辺朔郎さんの銅像と顕彰碑があり、京都と北海道の恩人とされています。その朔郎さんには、次男の主計さんと三男の多聞さんというおふたりの息子さんがおられ、それぞれ日本山岳会に入会されています。

日本山岳会には、三男の多聞さんが1918(大正7)年に入会し、会員番号は625。紹介者は、日本山岳会設立の発起人のひとりである高野鷹蔵さんと、父親で今回の会員章の持ち主であった朔郎さんです。多聞さんは61歳のとき、還暦記念のつもりで独りで富士山に登り、その後、日本山岳会の永年

会員にもなっています。登山に関しては、弟の多門さんが、兄の主計さんにとって先輩であったそうです。

次男の主計さんは、1933(昭和8)年3月に日本山岳会に入会。会員番号は1430。紹介者は、藤島敏男さんと実弟の田辺多聞さんです。主計さんは、弟の多聞さんに誘われて初めてスキーを教わり、雪山を歩く喜びを知ったそうです。主計さんは、図書室に百余冊の蔵書を寄贈し、ライブラリーの充実に大きく寄与されました。登山関係の翻訳書も多数あり、ケニス・メイسن著『ヒマラヤ その探検と登山の歴史』を望月達夫さんと共訳しています。名誉会員に推薦されましたが固辞し、また、永年会員の資格が生じる直前に、日本山岳会を退会しました。父親の朔郎さんは、主計さんが入会した年に退会されています。まさに父から息子さんへ、日本山岳会の伝統がバトンタッチされたかのようです。

今回、1枚の古い会員章から思いもかけず、日本山岳会を支えてくれた先駆者たちの息吹を感じることができました。

地域発「山の目」レポート⑨山陰支部

大山のナラ枯れを乗り越えて森づくり

山陰支部 吉岡淳一

昨年7月末ごろ、「大山^{だいせん}が危ない。紅葉の時期ではないのに赤くなっています。どうしたんですか？」という電話がジャンジャン掛かってきた。同じころ鳥取県は、テレビや新聞を通じて「数年前から大山にはナラ枯れを入れないぞ」と取り組んできたが、この猛威には手の施しようもない。とにかく

精一杯のことをしている」と伝えていた。

日ごろ大山で活動している私たちは、2つの疑問を感じた。1つは「大山でもそのうち終息する」ということ。捕虫、捕獲、駆除などの対策を打った効果で終息するというのが、ミズナラの木を食い尽くして食べるものがないから移動するだけではないのか。2つ目は40cm以上の大径木が枯れていると言われるが、この地区には大径木は少なく、若いミズナラが大半で、そ

の60〜70%やられているということであった。

このまま行政に任せていいのだろうか。この際「ナラ枯れについての勉強をしよう。やるからには日本でトップクラスの先生を招いて」と一気に決まり、長年ナラ枯れ病の究明と対策に苦勞されてきた神戸大学の黒田慶子教授に強引に依頼して、勉強会を開催した。

昨年9月1日、現地を視察された先生は、「こんなひどいナラ枯れは見たことがない、ここまで来れば手の打ちようがないね。今やっているような対策はムダ金だね。」とバツサリ。山を知り尽くしている私たちに丁寧なヒヤリングをされた後、「この際、将来を考えた方がよい。幸いに貴方たちが長年ブナを育て、植えてきた実践技術がある。元々ここにあったブナを活用して、大山にふさわしい森づくりをやるのでは」と提案された。

翌日の講演では、準備されていた資料を省略して大山に合った指針を提案されたが、とても納得のいく話に聴講した皆が元氣付けられた。

決まってからの行動は早かった。「ふさわしい森づくり」の具体策は、

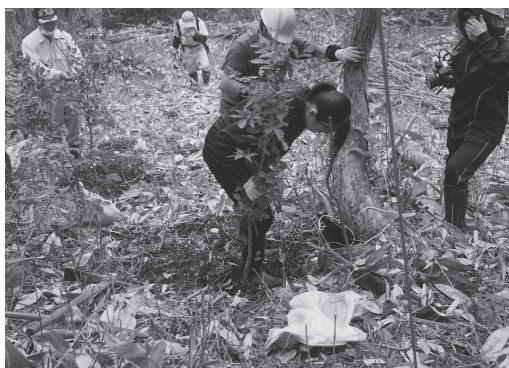
(1) 生きたミズナラを切り、萌芽再生をすること、(2) 我々が持ち合わせている2m以上に育てたブナの若木の植樹、(3) カエデ類(イタヤカエデとウリハダカエデ、ヤマモミジ)の山引き苗の植樹、(4) ミズナラの幼樹の育成、という4つの柱で進めた。地元の新聞やテレビ、ラジオなどを通じて一般市民にも呼び掛けると、労働組合関係者や一般企業人、高校生など、汗をかくことを惜しまない仲間がたくさん集まってくれた。

地主の鳥取県との協定締結行動と並行して、2mの高さで生い茂るクマザサ刈り、ミズナラの伐採そして、11月初旬には、2ヶ所のモデル地区にミズナラの萌芽再生10本とブナ170本を植樹。カエデ類50本も植え終え、クマザサを刈ることによって瀕死状態の幼樹も成長が期待できるようになった。この作業には延べ240人の方々が汗を流した。そして今年は、すでに4月から苗木作りを開始し、さらに昨年学習した経験を活かして、森づくり作業を安全で効率良く拡大していきたい。まだまだ先は長い。

(大山ブナを育成する会会長)



大山西側斜面の海拔600〜800m地帯で、ミズナラの70%前後が集中的にやられた(初夏の撮影)



枯れたナラの伐採作業後に行なったブナの植樹

連載■島の山旅への誘い⑥

小豆島・豊島

—三笠山、星ヶ城山、碁石山、洞雲山、皇踏山、壇山など

四国支部 尾野益大

小豆島・豊島の山の概説

明るく静かな瀬戸内海に浮かぶ小豆島は、古代から時代ごとに「あずきしま」「しろうずしま」とも呼ばれた。実が食用油になるオリブの国内栽培の発祥地、壺井栄の小説『二十四の瞳』の舞台、大阪城の石材の産地として有名だ。世界一短い海峡「土淵海峡」、シンパクとソテツの日本一の巨樹、自

由律俳人・尾崎放哉の終のすみかとしても知られる。

香川県高松市からの航路、船の便は多く、島にはバス、ホテルもある。気候が温暖なため登山は一年中楽しめる。島を横断する尾根の東部に鎮座する星ヶ城山が最高峰。観光用のスカイラインやロープウェイがあり、登山道、道標とも完備されている。豊かな自然林の下、道の高低差は少なく気軽に歩ける。古代遺跡や中世の山城跡など歴史的な見所が多い。

島の南東部の碁石山や洞雲山は、海岸線から見るとそそり立つ要塞のようだ。両山ともに中腹に小豆島霊場八十八ヶ所寺院があり、修験の道場。ただ標高が低いため短時間で周回できるうえ、大展望とスリルが魅力だ。島の西にある双耳峰の優美な皇踏山も中世の山城跡で、小豆島霊場八十八ヶ所寺院がある。

豊島は、小豆島の西3・7 kmに

ある。1970年代から産業廃棄物の全国最大級の投棄問題で話題となったが、近年、搬出が完了。空間と光をテーマにしたアート建築を見せる豊島美術館や、現代的なカフェやレストラン、10年余り前から復元してきた棚田が250枚以上あり、未知を求めてきた観光客を飽きさせない。ここでは登山と観光はおのずと一体となる。

主な山の登山ガイド

▲小豆島・三笠山、星ヶ城山

尾根上を走る小豆島ブルーラインの駐車場が登山口。ここはすでに610mの高さで、寒霞溪ロープウェイの山頂駅に隣接している。昭和から平成にかけて「ふるさと創生事業」で交付された1億円で造られた公衆トイレが話題になった。ここまではマイカーかタクシーを利用するか、麓から寒霞溪を歩いて登るか、ロープウェイに乗る。

登山口から東へ。草付の急斜面を登っても、左の巻き道をたどつ



ても三笠山(672m)に至る。山頂は平坦で広く、西方に向かって絶景だ。息を整えたら森の中の縦走路へ。

星ヶ城神社を参拝して、しばらく進むと、土塁や井戸跡など中世の山城の名残をとどめる遺物と次々出会う。西峰は巨岩が多数



三笠山から星ヶ城山を結ぶ尾根上の豊かな森



星ヶ城山の山頂。広く、古代から中世にかけての遺物がある

積み重なり、南面の展望が利いて瀬戸内海や高松市の屋島などが見える。

いったん坂を下り、再び登ると小豆島最高点の東峰。石積みの高い塔がシンボルだ。東西両方の峰に阿豆^{あずき}根島神社がある。星ヶ城山の名は、修験者の道場「法師城」「方土城」や星型に延びた尾根に由来するとされる。

帰りは来た道を戻るが、行きに立ち寄りなかった山城の複数の遺物を見ながら帰ってもいい。徒歩時間は約3時間。

▲小豆島・碁石山、洞雲山

内海湾からつつら折れの車道を

経て、碁石山中腹の小豆島霊場2番札所・碁石山に着く。岩壁に複数の建物が張り付いている感じだ。ここから歩き始め、岩穴を利用した奥の院を目指す。岩壁を削って造った階段へ。

尾根に出た後、岩壁を慎重に登る。ホールドはある。急坂の行者尾根を越えると洞雲山を結ぶ主稜線に出る。左へ進み、ウバメガシの純林下のアップダウンとなる。狭い山頂(435m)からは北の大嶽が目立っている。

洞雲山へは、まず行者尾根との分岐点まで戻り、南へ。下りぎみに続く広い尾根道は心地良い。尾根の幅は徐々に狭まり、岩稜の道に変わる。灌木帯を絡みながら慎重に進むと何度か視界が開き、石の祠が立つ最高点(350m)へ。右奥に星ヶ城山、右手前に碁石山が望め、左下に青い内海湾に接した街並みが箱庭のように見える。

下山も転落しないよう慎重に。赤テープを頼りに下るとやがて林道に出て右に曲がり、小豆島霊場1番札所・洞雲山に着く。巨大な岩穴に雲がとどまれば、神秘的な風景に見えるに違いない。すぐ前方が発した場所だ。徒歩時間は

約3時間。

▲小豆島・皇踏山

高松から船で土庄^{どしょう}港に近付くと、一番に目に入る山が皇踏山。尾崎放哉が住んだ西光寺の南郷庵の庭から、きれいに見上げられる山でもあった。「咳をしてもひとり」と詠んだ放哉を慕い、墓に詣でた山頭火は「鴉鳴いて私もひとり」と詠んだという。

さて、皇踏山の起点は港から近い小豆島霊場72番・滝湖^{たきうみ}寺の奥の院笠ヶ滝。そこまで車で入れる。岩壁をうがった石段を、鎖を握って登る。本堂を参拝した後、少し戻った旧鐘撞き堂から巻き道に入り、主稜線へと回り込む。ウバメガシが覆う緩い尾根道が続く、途中でマツタケを立



断崖上の洞雲山から望む碁石山(中央)

てたような巨岩と出会う。やがて東峰展望台(376m)に到着する。空、海、山の胸をすく絶景に出会える。しばしベンチに座りたい。

西方前方に山頂を見据えながら下りぎみに行くと、南北朝時代の武将、佐々木信胤が築いた山城の

虎口（入り口）。台地上に点在する見所は湿地や神社など数あるが、まずは道標に従って山頂を目指したい。背丈以上の笹原の切り分けられた道を右方向へと進むと、岩が累々とする間の道に変わり、坂を一気に登るとピーク（394m）に達する。

西向きに展望が開いている。帰りは来た道を引き返す。寺院の石段の下りは決して油断してはならない。徒歩時間は約2時間半。

▲豊島・壇山

約2万5000年前から人が住んでいた遺跡が残っている豊島。北西の家浦の港から車道をしばらく



豊島の最高峰は、美しい棚田の最上部にそびえる

く歩く。学校の前で道標に従って右へ。山裾から南東に上がる尾根の南斜面の車道をたどるわけだが、長い道のりだ。途中、ため池などがある。

頂上部は広大だが、分岐には道標があるから安心。最高点は三角点が埋まった340m。鉄塔の無線中継塔と展望台があり、見渡せば、瀬戸内海と一帯を埋め尽くす常緑広葉樹の重厚な森に癒される。下りは、少し戻って左へ。しばらく行くと右に曲がって豊峰権現社、岡崎公園を往復したい。公園の東屋からは高松市の屋島や五剣山、鬼ヶ島で有名な女木島、男木島が



干潮時に3つの島がつながる「エンゼルロード」

見える。

少し戻って、北西へ。目指すのは豊島美術館。ずっとシイの豊かな森の中を行く。地元では「トトロの森」と呼ぶそう。

アスファルトの車道に出ると十輪寺。ため池や牛が草を食む牧場も見える。外国人観光客にも人気の棚田が見え始めると美術館は近い。振り返ると、豊かな地下水の源となった壇山の森が遠くに仰げる。船の時間に余裕があれば、美術館、家浦までに点在するカフェやレストランに立ち寄りたい。徒歩時間は約3時間半。

山旅のメモ

小豆島行きの船は高松港からが便利。この欄では土庄港へ着く便を基準にした。冒頭の概説で紹介した名所・旧跡以外に、碁石山・洞雲山の麓にある島唯一の日本酒蔵や数々の醤油蔵も島の風土を教えられる場所だ。そうめん、佃煮も島の特産品。

星ヶ城山へは紅葉の寒霞溪からの登山もお勧め。星ヶ城山の南東にそびえる千羽ヶ嶽や島北東の吉田（小豆島オートビレッジYOSHIDA〈天然温泉付き〉）の岩壁

は、花崗岩に多彩なルートが開かれた岩登りのメッカだ。

皇踏山南麓の海岸で小豆島と陸続きの弁天島、中余島、大余島が干潮時の1日2回つながる「エンゼルロード」（海中から現われる海の道）は最近、若いペアが押し掛ける観光スポット。

豊島の壇山は車道歩きのため、登山靴でない方がよい。家浦港から貸し自転車で島を巡る方法もある。産廃投棄現場の見学は、土庄町役場に問い合わせが必要。船は高松、直島、小豆島を結ぶ航路がある。

◆問合せ先一覧…小豆島フェリー

リ（TEL087-822-4383）、
豊島フェリー（TEL087-851-4491）、小豆島オリブバス（TEL0879-620171）、小豆島交通（タクシィ、TEL0879-621203）、かんかけタクシィ（TEL0879-822288）、小豆島霊場会（TEL0879-620227）、寒霞溪ロープウェイ山頂駅（TEL0879-822171）、小豆島観光協会（TEL0879-821775）、土庄町役場（TEL0879-627000）。

（四国支部長）

図書受入報告(2021年4月～5月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年	寄贈／購入別
JAC東海支部(編)	インド・ヒマラヤ 改訂・増補版 : JAC東海支部創立60周年記念	733p／22cm	JAC東海支部	2021	発行者寄贈
須藤茂(編著)	旅客機から見る世界の名山 : 美しい山々を国際線の機窓から楽しむ	190p／26cm	イカロス出版	2021	出版社寄贈
中村保	未踏峰と三江併流 : ヒマラヤの東、最後の辺境	224p／23×30cm	ナカニシヤ出版	2021	著者寄贈
清水克宏	森の国 水の国 岐阜百秀山	279p／21cm	ナカニシヤ出版	2021	著者寄贈
日本山岳スポーツクライミング協会(編)	日本山岳・スポーツクライミング協会創立60周年記念誌 1960-2020	194p／28cm	日本山岳スポーツクライミング協会	2021	発行者寄贈
佐藤昌明	秋田・白神入山禁止を問う	243p／19cm	無明舎出版	2021	出版社寄贈
木下喜代男	飛騨の乗鞍岳	323p／21cm	岐阜新聞社	2021	出版社寄贈
梅沢俊	うめしゅんの世界花探訪	160p／26cm	北海道新聞社	2020	著者寄贈
勝山輝男／村川博實(写真)	高尾山に咲く花 : 残したい この豊かな自然	256p／18cm	有隣堂	2021	出版社寄贈
日本山岳会(編)	写真で振り返る日本人のエベレスト(写真集)	35p／24cm	日本山岳会	2021	当会発行
齋藤繁	健康トレーニング : 登山で病気に負けない体をつくる	247p／21cm	上毛新聞社デジタルビジネス局出版部	2021	群馬支部寄贈
ベア・ウースマ、レメンハルメ美穂(訳)	北極探検隊の謎を追って	305+11p／19cm	青土社	2021	出版社寄贈
山本正嘉	アスリート・コーチ・トレーナーのためのトレーニング科学	205p／26cm	市村出版	2021	著者寄贈
大野秀樹、大和会広報企画委員会(編)	ちょっとひといき : Take a Little Break	204p／17cm	エコー出版	2021	編者寄贈
信濃毎日新聞社出版部(編)	山並み大図鑑 : 信州山座同定navi	172p／20×21cm	信濃毎日新聞社	2021	出版社寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2021	147p／22cm	全日本山岳写真協会	2021	発行者寄贈
牧慎太郎	山族公務員の流儀	215p／19cm	時事通信出版局	2021	著者寄贈
西口正司	白き神々の森 : 世界自然遺産 白神山地の山々と自然の記録	233p／21cm	西口正司(私家版)	2021	著者寄贈
福田明夫(編) 守屋益男(監修)	新岡山の山100選	223p／24cm	吉備人出版	2021	出版社寄贈
中村幸人	植生から見る里山 : その保全と再生のために	150p／21cm	東京農大出版会	2021	出版社寄贈
韓国山岳会(編)	韓国山岳 2019 (No.39)	174p／22cm	韓国山岳会	2019	発行者寄贈
韓国山岳会(編)	韓国山岳 2020 (No.40)	221p／22cm	韓国山岳会	2020	発行者寄贈
McDonald, B. / Haroojae Club (Tr.)	Art of Freedom (ハングル版)	415p／24cm	Haroojae Club	2020	発行者寄贈
McDonald, B. / Haroojae Club (Tr.)	Winter 8000 (ハングル版)	459p／24cm	Haroojae Club	2021	発行者寄贈
Izumi, K. / Haroojae Club (Tr.)	遙かな山やま (ハングル版)	544p／20cm	Haroojae Club	2021	発行者寄贈
Cambridge Univ. Mountaineering Club	A Century of Cambridge Univ. Mountaineering Club	179p／21cm	Cambridge Univ.	2019	購入

東西南北

N

S

宗教登山ではない槍ヶ岳 初登頂

牛丸工

北アルプス・槍ヶ岳に最初に登頂した人物は播隆上人と中田又重(郎)で、文政11(1828)年7月に成し遂げられたことは、現在、ほかに記録が存在しないので登山史の常識となっている。

播隆上人は僧侶の、いわゆる宗教登山であったが、それでは宗教登山ではない登山で槍ヶ岳に初めて登った人物は、と問われたら多くの人は「ウィリアム・ガウランドとディロンで、明治10年7月のこと」と答えるであろう。

播隆上人とガウランドの間にどれくらいいないか、探した人物がかつていた。小島烏水である。小島は津田正成の『天保鍵ヶ嶽日記』を探し当て、天保4(1833)年7月に槍ヶ岳に登ったのではないかと

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

推測しているが、ここには美濃を出発して木曾までのことしか書かれてなく、その先がないために「幻の山岳書」と呼ばれた。小島以降多くの人が探したが、見付かっていない。そのため、登頂したか否かは不明である。

平成の大合併で安曇野市の一部となった旧三郷村は、平成18(2006)年3月24日に『三郷村誌Ⅱ 第二巻歴史編上』を発行した。その中に務台家が所蔵する古文書「公私年々雑事記」に、槍ヶ岳道法という箇所の書き下しがある。一部を要約すると、

天保6年7月1日(1835年7月26日)、三郷野沢村庄屋務台与一右衛門景邦ら2人は蝶ヶ岳を越え、二ノ俣の獵師小屋で休んでいると、槍ヶ岳から下山する4人と中田又重(郎)に出会った。翌7月2日(同年7月27日)、2人は槍を目指し登ると、岩小屋で播隆上人

に出会った。天気が悪かったが、播隆上人の案内で槍ヶ岳に登頂した。翌日の7月3日(同年7月28日)、再び播隆上人とともに登頂したがその日は天気が良く、遠く富士山も見ることができ、上高地に下山して湯屋で1泊して、4日には野沢の家に帰った。

なんと、ガウランドより42年も前に、槍ヶ岳に登っていた人物がいたのである。務台与一右衛門景邦は初めてこの道を通ったのではなく、かつて通ったことがあったのではないかと思ってしまう。初めて通る道であるならば、地名が実に明確であることに疑問を覚える。しかし、以前に通ったことがあるので、迷うことなく行き着くことができるのである。

この道は岩岡伴次郎が文政7(1824)年に、小倉から上口湯屋(温泉場、現在の上高地温泉ホテル)まで開通させた飛騨街道なのである。務台と岩岡はいわば隣近所のお互い庄屋であるから、知らない仲ではない。もしかしたら、務台は飛騨街道造りを手伝ったか、もしくは完成後、上口湯屋へ行ったことがあるのであろう。道に迷わず大滝山を越え、蝶ヶ岳を越え

る手前で梓川に下りている。下流に行けば温泉場に向かい、上流に行けば槍沢を経て槍ヶ岳にたどり着くことを知っていた。

その証拠に、槍ヶ岳に登頂し下山して3日目に上口湯屋に迷わずに寄っている。務台の槍ヶ岳登山は、飛騨街道開通の11年後なので、もしかしたら何度か大滝山を越え、二ノ俣に下りて湯屋に行っているかも知れない。そのため道中と地名を心得ていた可能性がある。

さらに、播隆上人と務台は知らない仲ではない。播隆上人は天保5年7月に藁で編んだ「善の綱」を槍ヶ岳に掛けるが、その藁を調達してくれたお礼に同年8月、播隆上人は野沢村庄屋務台家を訪れていて、感謝を述べているのである。そして、翌年の務台の槍ヶ岳登山となった。

明治6年3月にライマンの北海道地質測量の従者となり、明治13年から内務省勧農局地質課に勤務していた坂市太郎は、地質調査のため明治18年、島々から徳本峠を越えて梓川を遡り、槍ヶ岳を通り、三俣蓮華岳に縦走している。このとき坂市太郎は果たして槍ヶ岳に登頂しているかないか定かでない



2020年12月
北海道新聞社
B5判 160頁
2200円+税

北海道を代表する植物写真家

うめしゅんの世界花探訪

梅沢 俊著



図書紹介

はなく、また、一部文献では坂市太郎を案内したのが上條嘉門次ということになっているが、それらも定かではない。ただし、槍ヶ岳の肩付近を通ったことは確かであろう。

次に登場するのは明治35年8月、小島烏水と岡野金次郎ではなく、陸軍陸地測量部による測量であった。江戸時代までの鎖国のため、詳細な日本地図はなく、伊能忠敬の測量図があっただけに過ぎなかったが、近代化の流れの中で、全国

に三角点設置による測量が明治中ごろから始まった。槍ヶ岳は一等三角点ではなく二等三角点であり、直井武により明治35(1902)年7月6日が選点、造標設置は翌7月7日、観測は中島權により9月21日開始となった。

小島と岡野は、槍ヶ岳の頂上に三角櫓を建てている最中の明治35年8月17日、槍ヶ岳に登ったのである。槍ヶ岳付近には、役人や作業する人たちがたくさんいたことであろう。

「うめしゅん」こと梅沢俊氏のフォト・エッセイ。B5判いっぱいに私たちがふだんにすることのできない美しい高山植物の花々が咲いている。

本の3分の2が世界各地の花、3分の1が日本国内の花。初めに「海外での足跡一覧」が載っているが、花を求めての渡航は1980

年からほぼ毎年、数週間から数ヶ月にわたっての訪問を繰り返している。この一覧だけでも著者の花に対する探究心がうかがえるが、この探訪記では花にまつわる専門的な内容も、ユーモアたっぷりの軽妙な「うめしゅん」さんの語り口で知らず引き込まれる。

また、本文の前に添えられた「海外マップ」にて、写真の花々がどこで撮影されたかが分かりやすく掲載されている。主にはヒマラヤ山脈のブータン王国とネパールでの取材だが、「青いケシ研究会」の中心的メンバーのひとりでもある著者の「青いケシ」への執念とも言えるべき追跡は、この「世界花探訪」の大きなテーマである。

紙面上では自然の花が持つうつとりするような色彩、可憐さが目を惹かせてくれるが、実は湿潤な地帯での取材ではヤマビルの総攻撃を受けながらの撮影となる。筆者も蒸し暑い丹沢低山ではいつもヒルを気にしての山行だが、ブータン、ネパールはその比ではなく、長靴にまわりつくヒルの写真は、花の美しさとは裏腹な現実を見せている。

文中には「ヒマラヤで見る高山

植物の生存戦略」といった、苛酷な環境の中でいかに花を寒気や乾燥から保護して訪花昆虫を招こうとしているか、写真とともに分かりやすく解説するコーナーもあり、様々な角度から高山の花への興味を引き出してくれる。

さて、日本国内の花となると楚々とした風情で馴染みもあり、ほっとするが、やはり撮影にはそれなりの苦労が付きまとい、折り畳みハシゴを担いでの長い林道歩きなど努力を惜しまない。掲載写真のほとんどがアナログ・フィルム使用という点も驚きの一つであるが、著者自身「パソコン恐怖症の私はインターネットができない」と書いているのにはびっくりである。これだけ膨大なネガをどう整理し、どう頭の中に収めているのか？

そして、表立っては書かれていないが、ヒルの谷も長大な登降も、土砂降りの危険なテントも、すべての労苦を著者とともにして、あるときは硬膜下血腫で昏睡状態に陥った夫の救出・介護などなど、花探訪の相棒となつている著者の妻の偉大さにも敬服を抱き、本を閉じた。

(中村好至恵)

鳥海山に登る

佐藤 要著



鳥海山
2020年11月
私家版 A5判 298頁
2700円+税

みちのくきつての名峰、鳥海山への愛情あふれる、フルカラーの写文集である。

本書は、2014年に出版したガイドブック『鳥海山に登る 夏から秋の登山道ガイド』の続編と言う。「同じ山の同じルートを何回歩いても同じ山は一度もないことを表現したかった。その日その時の山は、二度と巡ってくるのではない貴重な時間である。その一瞬を記録するために写真という手段を選んだ。収録した記録の陰に、写真でうまく表現できなかった山行も数多くある。」と続ける。

全体は、「第一部 回想の山」と「第二部 再会の山」の二部構成になつている。第一部は10編からなり、美しい写真とエッセイのコンビネーションで綴られた、文字どおり回想記である。第二部は43編からなり、様々なルートや様々な

季節に登った鳥海山の、写真と文章による紀行となっており、ガイドブック的な要素も加味されている。

まず、見開き写真の美しさとクオリティの高さに感心する。とりわけ「残雪に残された足跡」「梅雨の晴れ間 扇子森のハクサンイチゲ群落」「長坂道T字分岐に咲くハクサンシヤジンとトウゲブキ」「七五三掛から稲倉岳に続くカルデラ壁」「錦繍の中島台と稲倉岳」「雲上の外輪山を行く」「夜明けの高山と影鳥海」「森林限界で仰ぐ山頂」「ニッコウキスゲ群落と笙ヶ岳」「秋色の千蛇谷などは傑作で、四季折々の鳥海山の魅力を余すところなく伝えてくれる。

「鳥海山には営業小屋があり避難小屋も多い。変化に富んだ朝夕の山の姿に出会うために、季節に合わせて様々な工夫や山行計画に頭を悩ますのも山の楽しみのひとつだ。」と綴る。一つの山でこれだけ多彩な表情を見せてくれる山は、そうそうないだろう。名峰と言われるゆえんである。

著者自身で写真をセレクトしたと思われるが、残念なのは写真点数が多過ぎること。類似カットが

寄附金および助成金などの受入報告 (令和3年4月30日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
松野 賢珠 会員	15	永年会員からのご寄附
江川 知史 会員	100	自然保護委員会運営費 及び総務委員会運営費
和田 薫 会員	30	山岳研究所運営委員会運営費
山田 智子 会員	10	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金
桐生 恒治 会員	50	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金
一万円未満 1名の氏名省略	-	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金

何点が見られ、せっかくのいい写真が減殺されているように思う。ページ数をもう少し減らし、写真を選挙することによって、見開きなど大判写真が活きてくるのではなからうか。

「私は『鳥海山に登る』旅の途中にいる」と著者は語る。向後の旅の成果に大いに期待したい。

購入希望者は直接、著者に連絡されたい。〒999-7781 山形県東田川郡庄内町余目土堤下
22-7 TEL 090-8925130
27 yamaruzaki@gmail.com

(節田重節)

ぶらっとヒマラヤ

藤原章生著



2021年2月 出版
毎日新聞 237円
新書変型判 1300円+税

勤続30年、定年間の毎日新聞記者が「ああ、人生って、なんて短いんだろ」そう思い始めたころ、初めての長期休暇を取り、ぶらっと登りに行ったのはネパール・ヒマラヤの高峰ダウラギリI峰（8167m）。著者の言葉を借りれば、本書は「登山を紹介し、それなりの年になった人間が考えた老い、恐怖、死、そして生についての記録」である。

2020年2月1日から7月11日まで、毎日新聞デジタル版医療プレミアで24回にわたり掲載され、その後、夕刊特集ワイドでも再掲された人気連載が加筆のうえ書籍化されたもの。

著者は1961年、福島県いわき市生まれ。14歳から山に親しみ、北海道大学工学部卒業後、エンジニアを経て、27歳から記者として長野、南アフリカ、メキシコ、イ

タリア、福島、東京に駐在。その後、郡山に異動し、ダウラギリ登山とともにする齋藤さんと出会う。

本書は、ダウラギリを目指すきっかけから、登山の様子、下山後の心身の変化に至るまでを、幼少期の体験や青年期の登山、取材体験などを重ね合わせながら描いている。全体は25の章で構成されており、その各タイトルからすでに面白い。「ダウラギリは演歌の響き」「名門幼稚園の遠足」「死に近づく時間は延びるそれは健全なことなのか」「切っ先の切っ先で知る『老い』」といったタイトルが目を引き、軽妙かつリアリティにあふれる文体でぐいぐいと引き込まれる。

8000mを超えるダウラギリでは、キャラバンの段階から高度の影響を受けて、歓喜から絶望へ、多幸感から「壮大なオペラ」のような自己嫌悪へと、精神状態はジェットコースターのように。著者は長きにわたる記者生活で「1日24時間、今いる自分の国、地域の理解にひたすらつとめ」、「その理解から得た考えや感情を自分なりに咀嚼して原稿という形で表に出」し

てきた。膨大な量のインプット・アウトプットを続けてきた著者だけに、単なる登山記ではない。ヒマラヤの高所という特殊な地で、自分自身が感じた恐怖や様々な感情、感覚を振り返ることで人間そのものを知らうとし、豊富な引用とともに「なぜ山に登るのか」「ひとはなぜ生きるのか」という根源的な問いに迫っていく。社会学者

の大澤真幸氏、ジミー・チン、リカルド・カシンなど多数のインタビュも本書を魅力的なものにしている。

手に取りやすいサイズ感で、可愛らしい装丁。老いも若きも、山に登る人も登らない人も、ぜひ本書を手にとって楽しんでもらいたい。

（井上優美）

会務報告

令和3年度第2回(5月度)理事会

議事録

日時 令和3年5月12日(水) 19時

00分～21時30分

場所 集会室十オンライン

【出席者】古野会長、山本・坂井各

副会長、永田・古川・萩原

各常務理事、安井・清登・

清水・飯田・柏・近藤・各

理事、石川・黒川監事

【欠席者】野澤副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和3年度通常総会について審議した。(賛成15名、反対0名)(永田)

2・第1号議案 令和2年度事業報告(案)について審議した。(賛

成15名、反対0名)(永田)

3・第2号議案 令和2年度決算報告(案)について審議した。(賛

成15名、反対0名)(古川)

4・第3号議案 定款施行細則改

定(案)について審議した。(賛成

15名、反対0名)(古川)

4・第3号議案 定款施行細則改

定(案)について審議した。(賛成

15名、反対0名）（永田）

5・第4号議案 令和3・4年度役員（案）について審議した。（賛成15名、反対0名）（古野）

6・令和3年度特定資産（固定資産）の取り崩し処理の承認について（追加）審議した。（賛成15名、反対0名）（古川）

7・山形支部の支部長交代について審議した。（賛成15名、反対0名）（永田）

8・静岡支部の支部長交代について審議した。（賛成15名、反対0名）（永田）

【報告事項】

1・6月19日総会閉会後に、臨時理事会を招集することについて報告があった。（古野）

2・寄附金および助成金受入6件について報告があった。（古川）

3・2021年度支部特別事業補助金についての補足説明と報告があった。（坂井）

4・全国山の日協議会への支援について報告があった。（古野・清登）

5・山研運営委員会の業務について報告があった。（安井）

6・緊急事態宣言中のルूमの利

用について報告があった。（柏）

7・広報委員会設立の準備について報告があった。（柏）

8・入会希望者の承認について報告があった。（古野）

9・『蘭花譜』の公開について報告があった。（清水）

10・産業技術総合研究所に貸し出した地図データの利用について報告があった。（永田）

11・日本山岳ガイド協会からの名義使用申請について報告があった。（永田）

12・田淵行男記念館館長交代について報告があった。（永田）

13・「山」5月号の発行について報告があった。（節田）別送

14・委員会の予算について報告があった。（古野）

ルーム目誌 5月

7日 常務理事会

11日 財務委員会

14日 理事會

14日 図書委員会

20日 会報編集委員会 フォトク

ラブ

5月来室者 37名

会員異動

物故

大島輝夫（4012）21・3・17

宇田川允敏（4508）21・5・19

田満字正和（4866）20・1・不明

梅野淑子（6224）21・1・18

鹿野松男（6705）21・4・9

小島高人（7390）21・5・20

大塚宏園（9602）21・4・17

岩瀬主夫（12337）21・3・23

福山美知子（12529）21・1・9

福島功夫（13314）20・8・21

湯口晴夫（13919）20・11・24

退会

田島 汎（4083）関西

中馬一枝（6352）福岡

平戸孝夫（8911）

鈴木千定（9138）福島

小田隆治（9301）北海道

四方宗和（10170）京都・滋賀

土佐洋一（10604）

坂田 恒（10665）

阿部敬子（11218）福島

米替誓志（12882）福岡

杉本寿子（13233）静岡

酒井晴永（13387）東京多摩

片山秀雄（13767）

戸島泰三郎（14035）関西

平城健二（14087）

中村鎮雄（14669）東海

佐々木由香（14874）

中村勝司（15215）福井

梶浦昌巳（15279）東海

谷 育子（15300）東海

井上忠臣（16312）東海

井上愛子（16313）東海

青木義仁（16470）東京多摩

大島幸夫（16505）

佐古明美（A0230）東京多摩

田辺敬子（A0238）

佐怒賀義邦（A0356）

INFORM
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆白峰三山縦走

山行委員会

南アルプス北部の盟主、我が国第2の高峰・北岳から第3の高峰・間ノ岳、農鳥岳へ3000m峰の縦走を楽しみませんか。

日程 8月19日(木)～22日(日)

集合 19日(木) 甲府駅バスターミナル1番乗り場 9時40分(10時05分発のバス乗車)

行程 19日・甲府駅→広河原→白根御池小屋(泊)

20日・白根御池小屋→小太郎尾根→北岳肩ノ小屋→北岳→北岳山荘(泊)

21日・北岳山荘→間ノ岳→農鳥岳→大門沢下降点→大門沢小屋(泊)

22日・大門沢小屋→広河原橋→奈良田(解散)

歩程 19日・約3時間10分

20日・約6時間

21日・約7時間30分

22日・約3時間40分

費用 3万8000円(山小屋代・保険料など)

定員 先着8名まで

申込み 8月6日(金)までに、数見直宛

TEL 090-7204-4668

✉ sanko@jac.or.jp

傷害保険加入のため、性別・生年月日をお知らせください。また、参加者名簿作成のため、会員番号、住所、緊急連絡先、電話番号、携帯電話番号などお知らせください。

◆上高地インタープリター活動への参加のお願い

山の自然学研究会

本会では創立当初から20年以上にわたり、上高地でインタープリター活動を行ない、大きな成果を挙げてきました。

しかし、近年は会員の高齢化などによりその実施が厳しくなってきました。会員の皆さまの協力をお願いいたします。

《本年の活動》

期間 8月11日から15日(5日間)

活動内容

①ミニトーク

夜、ホテル(西糸屋山荘、上高地アルペンホテル、上高地温泉ホテル)に出向いて宿泊客を相手に自然解説を行なう(かなりの参加者がある)。内容は上高地の自然を中心に、自分が取り

組んできた活動で紹介したいこと、など(1時間くらい)。

②ガイドウォーク

河童橋から明神まで、自然解説をしながら歩く。観光客に呼び掛けて参加してもらおう(9時河童橋を出発し、11時ごろ明神に到着を予定)。

以上のような活動ですが、参加してくださるようでしたら左記へご連絡をお願いいたします。

活動の詳細についてのご質問なども左記へお問合せください。

山の自然学研究会代表・源原重行

TEL 090-2548-7056

✉ mhr1940@bbr-t.com.ne.jp

訂正

◆会報5月号7ページ、2段目の後ろから4行目、「ドングドー谷」とあるのは「ロンドドー谷」の間違いでした。お詫びして訂正させていただきます。



◆編集後記◆

●今月号の黒田洋一郎会員の寄稿にあるように、「深田久弥さんは「世界百名山」の執筆で大方呻吟(しんしん)されていたようです。私も新米編集部員のころ、『日本百名山』に漏れた名山」というようなテーマで原稿を依頼したことがあります。多くの文筆家同様、深田さんも遅筆で、なかなか原稿をいただけなかったことを覚えています。

●締切りギリギリになってやっと連絡をいただき、押取り刀で東松原のご自宅へ。ところが、実際には現在執筆中で、玄関の小上がりで待たされること小1時間、インクが乾き切っていないような原稿を押し戴き、社に飛んで帰ったことでした。その原稿は、日本百名山に最も入れたかったという、ニペソツ山の紀行でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 913号

2021年(令和3年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社